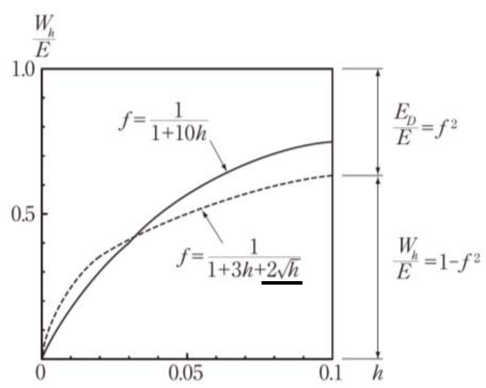
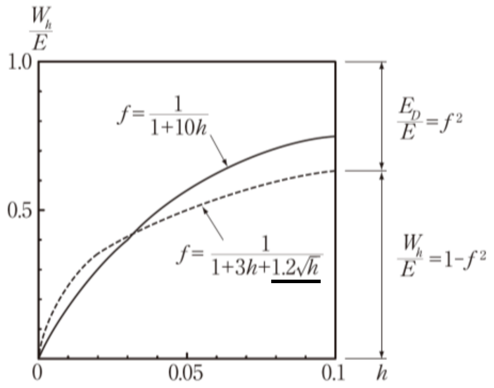
「性能評価を踏まえた免震・制震構造の設計」【第１版１刷】
本文の一部において誤字・脱字が判明しています。下記の「正誤表」にてご対応下さいますようお願い致します。

掲載頁 (掲載箇所)	項	目
P16 (2.1.5 式)	誤	$Q_i{}' = Q_{p\delta i} - Q_{p\delta i+1} = -k_{p\delta i+1}\delta_{i+1} + k_{p\delta i}\delta_i$ $= -k_{p\delta i+1}y_{i+1} + (k_{p\delta i} + k_{p\delta i+1})\,y_i - \underline{k_{p\delta i+1}}y_{i-1}$
	正	$Q_i{}' = Q_{p\delta i} - Q_{p\delta i+1} = -k_{p\delta i+1}\delta_{i+1} + k_{p\delta i}\delta_i$ $= -k_{p\delta i+1}y_{i+1} + (k_{p\delta i} + k_{p\delta i+1})\,y_i - \underline{k_{p\delta i}}y_{i-1}$
P17 (2.1.6 式)	誤	$Q' = K_{p\delta}y$ ここで，$K_{p\delta} = \begin{bmatrix} \underline{k_{p\delta 1} + k_{p\delta 2}} - k_{p\delta 2},\ 0 \\ \cdots\cdots\cdots \\ 0, -k_{p\delta i},\ k_{p\delta i} + k_{p\delta i+1}, -k_{p\delta i+1},\ 0 \\ \cdots\cdots\cdots \\ 0, -\underline{k_{p\delta N-1}},\ k_{p\delta N} \end{bmatrix}$
	正	$Q' = K_{p\delta}y$ ここで，$K_{p\delta} = \begin{bmatrix} \underline{k_{p\delta 1} + k_{p\delta 2},} - k_{p\delta 2},\ 0 \\ \cdots\cdots\cdots \\ 0, -k_{p\delta i},\ k_{p\delta i} + k_{p\delta i+1}, -k_{p\delta i+1},\ 0 \\ \cdots\cdots\cdots \\ 0, -\underline{k_{p\delta N}},\ k_{p\delta N} \end{bmatrix}$
P17 (26 行目)	誤	$F(\underline{\dot{y}})$が弾性の場合
	正	$F(\underline{y})$が弾性の場合
P18 (8 行目)	誤	慣性力$M\underline{\dot{y}}$のdyによる積分項は
	正	慣性力$M\underline{\ddot{y}}$のdyによる積分項は
P20 (2.1.17 式)	誤	$\dfrac{S_v}{\underline{V_E}} = \dfrac{V_D}{V_E} = \dfrac{1}{1+3h+1.2\sqrt{h}} = f$
	正	$\dfrac{S_V}{\underline{V_E}} = \dfrac{V_D}{V_E} = \dfrac{1}{1+3h+1.2\sqrt{h}} = f$
P20 (2.1.17 式)	誤	$\dfrac{S_v}{\underline{V_E}} = \dfrac{1}{1+10h}$
	正	$\dfrac{S_V}{\underline{V_E}} = \dfrac{1}{1+10h}$

掲載頁 (掲載箇所)	項目	
P20 (図-2.2.1)	誤	
	正	
P21 (2.2.22 式)	誤	$Q_{Yi}=\alpha_i\left(\sum_{i=1}^{N}m_j\right)g$ ここで，$\left(\sum_{i=1}^{N}m_j\right)$: i 層より上部の質量の合計値
	正	$Q_{Yi}=\alpha_i\left(\sum_{j=i}^{N}m_j\right)g$ ここで，$\left(\sum_{j=i}^{N}m_j\right)$: i 層より上部の質量の合計値
P22 (2.2.24 式)	誤	ここで，$s_i=\left(\frac{\sum_{j=i}^{N}mj}{M}\right)^2\overline{\alpha}_i^2\cdot\frac{k_1}{k_i}$
	正	ここで，$s_i=\left(\frac{\sum_{j=i}^{N}m_j}{M}\right)^2\overline{\alpha}_i^2\cdot\frac{k_1}{k_i}$
P22 (22～ 28 行目)	誤	現実に，$\alpha_i/\alpha_1=\overline{\alpha_1}$ の下では W_e は式 (2.2.24) に近い値になる。一方 W_p は式 (2.2.26) で表現することは一般的に困難といえる。Nが小さい範囲では $\overline{\alpha_1}$ の存在は確かめられるが，Nが大きくなるとその存在が疑わしくなり，また $\overline{\alpha_1}$ は地震波により多少異なりまた構造物の剛性分布，骨組形式にも左右されるからである。それでも，$N\leq 10$ の範囲では $\overline{\alpha_1}$ の存在は確かめられる。そこで，この範囲における $\alpha_i/\alpha_1\neq\overline{\alpha_1}$ の場合の損傷分布の傾向を示すことによって，損傷分布予測の多様性と困難性を示してみよう。損傷分布の支配因子は α_i/α_1 の $\overline{\alpha_1}$ よりの偏差であり，最も単純な表現として次式が与えられる [1), 3)]。
	正	現実に，$\alpha_i/\alpha_1=\overline{\alpha_i}$ の下では W_e は式 (2.2.24) に近い値になる。一方 W_p は式 (2.2.26) で表現することは一般的に困難といえる。Nが小さい範囲では $\overline{\alpha_i}$ の存在は確かめられるが，Nが大きくなるとその存在が疑わしくなり，また $\overline{\alpha_i}$ は地震波により多少異なりまた構造物の剛性分布，骨組形式にも左右されるからである。それでも，$N\leq 10$ の範囲では $\overline{\alpha_i}$ の存在は確かめられる。そこで，この範囲における $\alpha_i/\alpha_1\neq\overline{\alpha_i}$ の場合の損傷分布の傾向を示すことによって，損傷分布予測の多様性と困難性を示してみよう。損傷分布の支配因子は α_i/α_1 の $\overline{\alpha_i}$ よりの偏差であり，最も単純な表現として次式が与えられる [1), 3)]。

掲載頁 (掲載箇所)		項　　　　目
P23 (4 行目)	誤	$k=1$ とし，$p_1=1.0p_{i\neq1}=p_d$ とすれば，$s_1=1.0$ であり次式が得られる。
	正	$k=1$ とし，$p_1=1.0$，$p_{i\neq1}=p_d$ とすれば，$s_1=1.0$ であり次式が得られる。
P23 (2.2.31 式)	誤	$W_{e1}\sum_i s_i=\dfrac{(Mg\alpha_1)^2\sum_i s_i}{2k_1}=\dfrac{(Mg\alpha_1)^2\sum_i s_i}{2k_1k_{eq}}=\dfrac{MV_D^2}{2}$
	正	$W_{e1}\sum_i s_i=\dfrac{(Mg\alpha_1)^2\sum_i s_i}{2k_1}=\dfrac{(Mg\alpha_1)^2\sum_i s_i}{2\kappa_1k_{eq}}=\dfrac{MV_D^2}{2}$
P24 (2.2.36 式)	誤	$=D_s\alpha_{el}$ ここで，D_s：構造特性係数 $\alpha_{el}=\dfrac{2\pi V_D}{Tg}$　：弾性系の第 1 層の降伏せん断力係数
	正	$=D_s\alpha_{e1}$ ここで，D_s：構造特性係数 $\alpha_{e1}=\dfrac{2\pi V_D}{Tg}$　：弾性系の第 1 層の降伏せん断力係数
P24 (6 行目)	誤	式(2.2.35)より $\sqrt{\kappa_1/\sum_i s_i\neq1.0}$ で近似できる。
	正	式(2.2.35)より $\sqrt{\kappa_1/\sum_i s_i}\fallingdotseq1.0$ で近似できる。

P26
(表-2.3.1)

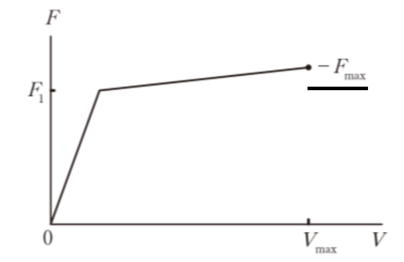
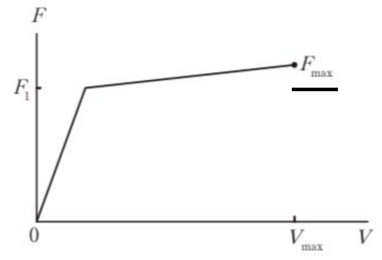
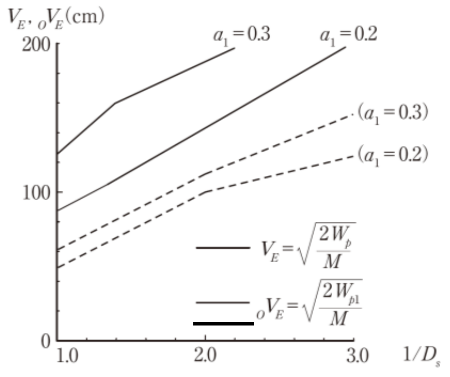
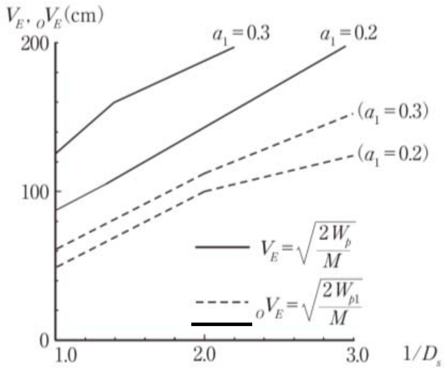
誤

構造種別		$_rQ$	n	γ_1	a_d	δ_r/δ_p	P-δ効果	減衰関数
非柔剛混合構造	柱降伏型	<1.0	12	式(2.2.28)	2.4~5.0 (4.0)	≤0.5	有り	式(2.2.17)
	梁降伏型		6					式(2.2.18)
柔剛混合構造	損傷集中型 (免震構造)	≥1.0	∞	1.0	6.0~20.0 (10)	≤0.1	無し	$h=0$
	損傷分散型 (制震構造)		2~4 (3)	式(2.2.28)				式(2.2.17)
								式(2.2.18)

正

構造種別		$_rQ$	n	γ_1	a_d	δ_r/δ_p	P-δ効果	減衰関数
非柔剛混合構造	柱降伏型	<1.0	12	式(2.2.28)	2.4~5.0 (4.0)	≤0.5	有り	式(2.2.17)
	梁降伏型		6					式(2.2.18)
柔剛混合構造	損傷集中型 (免震構造)	≥1.0	∞	1.0	6.0~20.0 (10)	≤0.1	無し	$h=0$
	損傷分散型 (制震構造)		2~4 (3)	式(2.4.15)				式(2.2.17)
								式(2.2.18)

掲載頁 (掲載箇所)		項　　　　目
P27 (11 行目)	誤	すなわち，$\gamma_i=1.0$ であり，
	正	すなわち，$\gamma_1=1.0$ であり，
P27 (27 行目)	誤	S_v のレベルで余裕を持たすことが
	正	S_V のレベルで余裕を持たすことが

掲載頁 (掲載箇所)		項　　　目
P28 (1 行目)	誤	${}_f a_1$= 柔要素の降伏せん断力係数
	正	${}_f a_1$= 柔要素のせん断力係数
P28 (図-2.4.1)	誤	
	正	
P30 (図-2.4.3)	誤	
	正	
P31 (11 行目)	誤	したがって，損傷が集中する階は 1.4.7.……$2N'+1$ (N'：整数) である。
	正	したがって，損傷が集中する階は 1,4,7,……$3N'+1$ (N'：整数) である。
P31 (2.4.17 式)	誤	$W_p=\frac{MV_D^2}{2}=\frac{W}{2}\frac{V_E^2}{\left(1+3h+1.2\sqrt{h}\right)^2}$
	正	$W_p=\frac{MV_D^2}{2}=\frac{M}{2}\frac{V_E^2}{\left(1+3h+1.2\sqrt{h}\right)^2}$
P31 (2.4.18 式)	誤	$\alpha_{s1}a_d\delta_{pm1}\gamma_1=\frac{h_{eq}}{\left(1+3h+1.2\sqrt{1.2}\right)^2}$
	正	$\alpha_{s1}a_d\delta_{pm1}\gamma_1=\frac{h_{eq}}{\left(1+3h+1.2\sqrt{h}\right)^2}$
P32 (4 行目)	誤	δ_{pm1} を大きくするためには δ_{m1} を大きくする必要があり
	正	δ_{pm1} を大きくするためには δ_m を大きくする必要があり
P32 (9 行目)	誤	${}_rQ$ の目標値を ${}_r\overline{Q}$ とすれば，式(2.3.2)から柔要素の最大変形下の復元力 ${}_fQ_{mi}$ は次のように
	正	${}_rQ$ の目標値を ${}_r\overline{Q}$ とすれば，式(2.3.2)から柔要素の最大変形下の復元力 ${}_fQ_{m1}$ は次のように

掲載頁 (掲載箇所)		項　　　目
P32 (2.4.21 式)	誤	$_f\underline{Q_{mi}} = {}_sQ_{Y1r}\overline{Q}$ ここで，$\underline{_fQ_{Yi}}$：1 層の剛要素の降伏せん断力
	正	$_f\underline{Q_{m1}} = {}_sQ_{Y1r}\overline{Q}$ ここで，$\underline{_sQ_{Y1}}$：1 層の剛要素の降伏せん断力
P32 (2.4.22 式)	誤	$\underline{_0k_1} = \frac{_fQ_{m1}}{\delta_{m1}}$ ここで，$\underline{_0k_1}$：1 層の柔要素のばね定数
	正	$\underline{_fk_1} = \frac{_fQ_{m1}}{\delta_{m1}}$ ここで，$\underline{_fk_1}$：1 層の柔要素のばね定数
P32 (2.4.23 式)	誤	$\underline{_fQ_{m1}} = \underline{_0\delta_{m1}} + \frac{W}{H}\delta_{m1}$
	正	$\underline{_fQ'_{m1}} = \underline{_fk_1 \cdot \delta_{m1}} + \frac{W}{H}\delta_{m1}$
P32 (2.4.24 式)	誤	$\underline{_fK_1} = \underline{_0K_1} + \frac{W}{H}$ ここで，W：建物重量
	正	$\underline{_fk'_1} = \underline{_fk_1} + \frac{W}{H}$ ここで，W：建物重量
P32 (29 行目)	誤	鉄筋コンクリート構造では PC 圧着関節工法[2]は大きな可能性
	正	鉄筋コンクリート構造では PC 圧着関節工法[7]は大きな可能性
P33 (2.4.25 式)	誤	$\alpha_1 = D_s\underline{\alpha_{ei}}$ ここで，$D_s = \frac{1}{\sqrt{1+\frac{W_p}{W_e}}} = \frac{1}{\sqrt{1+\frac{2\eta_1\gamma_1}{\sum_i s_i}}}$ W_e：弾性振動エネルギー W_p：累積塑性ひずみエネルギー $\alpha_{e1} = \frac{2\pi V_D}{Tg}$ $V_D = \frac{V_E}{1+3h+1.2\sqrt{h}}$ T：1 次固有周期 $\underline{\sum{}_i} s_i = 0.36 + 0.64N$
	正	$\alpha_1 = D_s\underline{\alpha_{e1}}$ ここで，$D_s = \frac{1}{\sqrt{1+\frac{W_p}{W_e}}} = \frac{1}{\sqrt{1+\frac{2\eta_1\gamma_1}{\sum_i s_i}}}$ W_e：弾性振動エネルギー W_p：累積塑性ひずみエネルギー $\alpha_{e1} = \frac{2\pi V_D}{Tg}$ $V_D = \frac{V_E}{1+3h+1.2\sqrt{h}}$ T：1 次固有周期 $\underline{\sum_i} s_i = 0.36 + 0.64N$
P36 (17 行目)	誤	弾塑性系の応答解析に基づき，$V_D \leqq \underline{S_e}$ の妥当性を検討
	正	弾塑性系の応答解析に基づき，$V_D \leqq \underline{S_V}$ の妥当性を検討

掲載頁 (掲載箇所)		項　　　目
P36 (17 行目)	誤	弾塑性系の応答解析に基づき，$V_D \leqq S_v$ の妥当性を検討
	正	弾塑性系の応答解析に基づき，$V_D \leqq S_V$ の妥当性を検討
P36 (18 行目)	誤	したがって，**図-2.2.1** の E_D/E は S_v/E に一致し，同図は
	正	したがって，**図-2.2.1** の E_D/E は $(V_D/V_E)^2$ に一致し，同図は
P36 (25 行目)	誤	応答解析により速度応答スペクトル $S_v(T)$ を求める。S_v は地動継続時間内の
	正	応答解析により速度応答スペクトル $S_V(T)$ を求める。S_V は地動継続時間内の
P36 (2.A.2 式)	誤	$\frac{Mg^2T^2}{4\pi^2}\cdot\frac{\alpha_1^2}{2}=\frac{Ms_v^2(T)}{2}$
	正	$\frac{Mg^2T^2}{4\pi^2}\cdot\frac{\alpha_1^2}{2}=\frac{MS_V^2(T)}{2}$
P36 (2.A.3 式)	誤	$\alpha_1=\frac{2\pi s_v(T)}{Tg}$
	正	$\alpha_1=\frac{2\pi S_V(T)}{Tg}$
P37 (25 行目)	誤	W_e/E(ないし E_D/E) を適切に評価できるものとして
	正	W_h/E(ないし E_D/E) を適切に評価できるものとして
P124 (3.5.17 式)	誤	$\frac{1}{2}m\dot{x}_{t0}^2+\int_0^{t_0}c\dot{x}dt+\int_0^{x_{t0}}f(x)dt=-m\int_0^{t_0}\ddot{x}_0\dot{x}dt$
	正	$\frac{1}{2}m\dot{x}_{t0}^2+\int_0^{t_0}c\dot{x}^2dt+\int_0^{x_{t0}}f(x)dt=-m\int_0^{t_0}\ddot{x}_0\dot{x}dt$
P227 (5 行目)	誤	アスペクト比$H/\sqrt{BD}$あるいは$H/\sqrt{D_m}$が小さい場合は
	正	アスペクト比$H/\sqrt{BD}$あるいはH/D_mが小さい場合は
P227 (7 行目)	誤	無次元風速$U/f\sqrt{BD}$あるいは$U/f\sqrt{D_m}$は,建築物平面の
	正	無次元風速$U/f\sqrt{BD}$あるいはU/fD_mは,建築物平面の
P233 (5 行目)	誤	$Wo=\int_0^{2h}(\tau+\tau_s)dt$
	正	$Wo=\int_0^{2h}\left(f(\tau)+f(\tau_s)\right)dt$